



# NEWSLETTER

～ 水を守り 湖を救う ～

公益財団法人 国際湖沼環境委員会(ILEC)  
本ニュースレターには、英語版もございます。

アイレック



## 溢れるユースパワー@WLC19

第19回世界湖沼会議(WLC19)の「バラトン宣言」には、「持続可能な湖沼管理を促進するために、計画、意思決定、実施、評価などあらゆるレベルで若者の情熱、エネルギー、ビジョンを動員する」との提言が盛り込まれました。湖沼環境保全への若者の関与は、今後ますます重要となります。そこで今回、次世代リーダー育成事業としてILECよりWLC19に派遣したユース6名に参加後の感想を語っていただきました。

### — 分科会に参加 —

『山・里・湖の繋がりを感じられる「たどる」を「たのしむ」エコツーリズム』

ローカルキュレーターとの協力を得て、大津市守山地区で実施しているツアーを紹介。エコツーリズムを通じて地域経済を活性化すると共に、湖の生態系と地域の結びつきを強め、環境保全に貢献する仕組み作りについて発表。



### 産学官の連携



平良 珠朱  
成安造形大学

守山地区という小さな地域で行ったツアーを世界に向けて発信することができ、とても感慨深いものがありました。ローカルキュレーターからは「自分たちの地域のコンテンツを再確認して、ツアーを組み立てられて良かった」。参加者からは「住民の裏庭に遊びにこさせてもらっている感覚」との声をいただきました。今後この取組を持続的に行うため産学官の連携を目指しています。大学でプロジェクト化、又は事業化に繋げ、守山地区を拠点に活動している一般社団法人シガーシガに、守山自治会と学生のアテンドを行ってもらう事で、お互いに学びがある、且つ、持続可能なツアーを企画しています。その実現に向け、展示を行い、認知を広げられるように動いています。

### 地域と共に持続



佐々木 良緒  
成安造形大学

ツアーの企画から開催、発表まで行うことで表面的な持続可能性を追うのではなく、地域と共に持続するツーリズムを作ることの本当の意味での難しさを感じました。また、地域の方々と何度も話し合いを重ねることで、地域への解像度もとても高くなり、訪れるたびに地域の小さな魅力や文化をたどる楽しさも知ることができ、とても実りのある時間を過ごすことができました。



## — 分科会、ユースセッションに参加 —

### 『びわ湖の研究者になろうツアー』

所属するNPO法人国際ボランティア学生協会 (IVUSA) において、小学生を対象に企画・実施しているエコツーリズムツアーについて発表。琵琶湖版のSDGsである「マザーレイクゴールズ (MLGs)」のゴールの一つ「地元も流域も学びの場に」の達成を目指す。

### 『Youth Power in Action: Youth-driven Innovations for Sustainable Lake Management』

ユースの持続可能な活動の在り方や湖沼環境保全に携わるユースの輪を広げるために何が必要かを議論し、今後の行動計画を共有。

## 十国十色



伊藤 佐恵子  
京都外国語大学

分科会では、私たちの活動を国際的な場で発表できる機会をいただき、誇らしく思いました。専門的で難しいような発表が多いなか、発表中にうなずきや笑顔をいただけて、立場や世代等関係なく評価をしてもらえてうれしかったです。

ユースセッションでは、国際的なイベントにリーダーとして参加することが初めてだったので、何かを作り上げることの難しさを感じました。国ごとに優先度が違ったり、日本にあるものが海外にはなかったり、その逆もあり、対面でお互いの顔を見て生の声を聞いたからこそ感じるものがありました。また、世代を問わず、セッションに参加した専門家の意見も聞くことができ、刺激になりました。大学卒業後も国際的な環境活動を続けていきたいです。

## 言語の壁



田邊 有香  
京都外国語大学

分科会で私たちが発表したツアーの内容は、昨年度のコンテスト時、まだアイデア段階でした。WLC19までの1年間で実際にツアーを開催し、子どもたちの意見も反映してパワーアップした内容で世界に発信することができました。今後もこのツアーを単発で終わらせることなく、IVUSAの後輩に引き継いでいきます。

ユースセッションでは、外国の方たちとの意見も交えながらセッションを作り上げることは大変困難でした。だからこそセッション当日は、非常に達成感がありました。海外の方の湖に対する想いや環境問題を知ることで知識が深まり視野も広がりました。また、言語の壁に直面したことでコミュニケーションにおいて英語がとても重要なツールであると感じ、言語学習のモチベーションにも繋がりました。

## — ユースセッションに参加 —

## 参加者間の交流



畠 麻理奈  
立命館大学

今回は私にとって二度目の世界湖沼会議への参加でした。第18回会議では、開催国であったメキシコに足を運ぶことはできませんでしたが、滋賀県のスペシャルセッションにおいて企画やモデレーターを担当しました。WLC19は、ハンガリーでの現地開催となり、セッションのみならず研究者の方々や同世代のユースと意見交換が出来たことが嬉しかったです。時差が大幅にある5カ国合同での会議を何度も重ね、多くの方に見ただけのセッションになったこと、そして、国際関係学部で学んでいることや滋賀県での活動を学外・国内外に発信できたことは大きな自信につながりました。関わってくださった全ての方への感謝を今後のユースセッション継承で恩返ししていきたいと思っています。

## オーストラリアへ



窪園 真那  
立命館大学

ユースの活動や意見を発信することは非常に大きな意義があり、その構築に関わることができ非常に嬉しかったです。ディレクターとしてセッションの構成から目標まで見据えて進め方を何度も考え、プレゼンテーションではビジュアルで訴えたり、声のトーンや表情を意識し、聞いている人たちが積極的に関与してくれるような工夫をしました。湖沼環境をはじめとした環境問題では「世代間の公平性の欠如」が着目されます。しかし、私が会議を終え感じたことはユースが積極的に声を上げ、行動に移して状況を変えていくことの重要性です。私たちの次の世代や今回の参加国以外のユースも巻き込み、次回2025年のオーストラリアでの湖沼会議に引き継ぐことが私たちの新たなミッションだと思っています。



# 元JICA研修員からの便り

国立湖沼保全開発委員会  
プラヴァ・パンディ（ネパール）

## 統合的湖沼流域管理（ILBM）のアプローチ： ネパール湖沼の持続可能な保全に向けた効果的なツール

湿地は生態学的、経済的、文化的、およびレクリエーションの価値において重要です。これらの生態系は、世界中の人々に対して商品やサービス、そして収入をもたらします。湿地には主に二つの価値が存在します。一つ目は生態学的な価値（野生動物の生息地、環境の維持、生態的なバランスなど）、二つ目は経済的な価値（生産的な生態系、水供給など）です。

ネパールのヒマラヤは、高地から低地に至るまで湖と湿地が織りなす多様な地形を有しています。湖沼や湿地は灌漑用水の供給、生物多様性の維持、エコツーリズムを通じた生計の向上、文化的および精神的な発展の基盤をもたらします。ネパールには6,000以上の河川、3,252の氷河、2,323の氷河湖、いくつかの構造湖\*1および牛角湖\*2があるとの研究や報告があります。国立湖沼保全開発委員会はそのうちの5,358をネパールの湖沼として認定しています。

ネパールの湖沼はヒマラヤの特性を有しています。湖沼はアジアの給水塔であり、多くのラムサール条約湿地であり、国境を越えた自然であり、生物多様性の重要地域であり、高い宗教的・文化的価値でもあります。湿地は、急流の永久河川から季節河川、高地の氷河湖から低地の牛角湖、溝地から沼地・湿地、川の氾濫原から水田、人工の貯水池から村のため池まで、動植物にとって生物多様性の重要な生息地です。



クビンデ湖・サラヤン地区

ヒマラヤの湖沼や湿地の自然は様々な「脅威」にさらされています。湖沼問題の直接的な原因は、資源の利用と湖沼内外の人的活動の両方から発生する可能性があります。「脅威」の性質と程度は地理的位置と人為的な圧力の大小によって異なります。一方で、観光産業と気候変動に強い湖沼環境を両立させるためには湖沼の保全と再生に対する一般市民の意識を高める必要があります。これは問題の根本原因と解決策を見つけることによってのみ実現可能です。統合的湖沼流域管理(ILBM)は、湖沼と湿地の問題に対処するための適切な管理ツールであり、最終的にガバナンス構造の改善や持続可能な保全に役立ちます。このことからネパールではILECの支援を受けてILBMが導入されました。このアプローチは、気候変動に強い湖沼のガバナンスによってもたらされる生物多様性、観光促進、そしてコミュニティの暮らしの向上に役立ち、持続可能な湖沼の繁栄、英知、平和を目指すものです。ネパールの湖沼と湿地の保全においてILBMの6本柱が主要な取り組みとされています。ILBMでは、森林や水資源の保全に関して、参加型の総合的な保全活動が成果を上げるには、十分な時間が必要であることを示しています。



ティリチョ湖・マナン地区

\*1 構造湖……地殻変動によって誕生した湖。

\*2 牛角湖……蛇行の著しい河川で、河道の変化により一部が取り残されて湖沼となったもの。牛の角のような形状。

# 2023年度のILEC

科学委員会総会  
2023年11月10日



今年度は、第19回世界湖沼会議（WLC19）の開催を中心に**国際協力**活動を展開しました。WLC19は第5回国連環境総会（UNEA5.2）での「持続可能な湖沼管理（SLM）」の決議採択後初の開催となり、SLMの湖沼環境保全における重要性を世界に発信する絶好の機会となりました。また、SLMの推進に不可欠な**人材育成**事業として各国の湖沼関係者への研修を実施しました。

ILECは**科学委員会**を軸として、国連環境計画（UNEP）や各国政府機関等と連携し、世界規模でSLMを推進してまいります。

## ◆ 2023年国連水会議



2023年3月22日～24日



46年ぶりにニューヨーク国連本部で開催され、インドネシア政府およびUNEPが主催したサイドイベントにおいて琵琶湖の経験からSLMに貢献できることやILECの「水行動アジェンダ」（自発的な公約）を提示。会議の成果物には、「気候変動や水質、水辺生態系の悪化などの緊急課題に対応すべく『世界湖沼の日』を制定する」との提言が明記。

## ◆ 世界湖沼会議に向けたワークショップ



2023年9月29日

琵琶湖・淀川流域の専門家・科学者により“SLM達成に向けて：琵琶湖・淀川流域はどう貢献できるか”をテーマに議論。そのサマリーを「琵琶湖・淀川流域の経験にみる湖沼・河川・沿岸流域が直面するSLMの現状と課題」としてWLC19・国際コロキウムで発表。

## ◆ 第19回世界湖沼会議（WLC19）・国際コロキウム



2023年11月7日～9日

ハンガリー・バラトンフュレドにおいてバラトン湖開発局とともに“湖沼を越えて：持続可能な利用に向けて科学・文化・ガバナンスを繋ぐ”をテーマに開催。バラトン湖畔での開催は、第3回会議（ケストヘイ）以来、35年ぶり2回目。世界30カ国より354人が参加。11月6日にサイドイベントとして、国際コロキウム“SLMの推進に向けて：課題、現状、教訓”をUNEPと共催。世界16カ国以上より134人が参加。





## ◆ JICA草の根技術協力事業



2023年7月24日～25日

ハロン湾・カットバ島沿岸水域の水環境改善を目的として、産官学民が連携し水環境保全等と同時に経済発展を図る「琵琶湖モデル」について学ぶ研修を実施。滋賀のエコツーリズム推進の紹介を行い、環境保全対策に繋がる取組を推進。ベトナムハイフォン市・クアンニン省行政機関職員等6名が参加。

## ◆ 2023年度マレーシアにおけるPESSVA導入プロジェクト



2年目を迎えた「住民の生態系サービス共有価値評価 (PESSVA)」プロジェクトでは、マレーシア北西部に位置するブキットメラ湖を対象に、湖沼の価値評価調査を流域住民、漁業者、行政関係者等に実施。調査結果を多様な関係者と議論することで湖沼管理への動機づけや流域住民等多様な関係者の参加を促進。類似取組の他国での自発的な拡大を目指し、WLC19で本プロジェクトについてマレーシア国立水利研究所 (NAHRIM) から発信。

## ◆ 2023年度JICA課題別研修 「水資源の持続可能な利用と保全のための統合的湖沼・河川・沿岸流域管理」



遠隔研修 (2023年11月20日～12月8日)

来日研修 (2024年1月10日～2月14日)

琵琶湖淀川流域における流域管理の経験を通してILBMの概念を学ぶ研修を実施。アルバニア、中央アフリカ共和国、チャド、キューバ、エルサルバドル、インド、ニカラグア、ナイジェリア、南スーダン、バングラデシュ、メキシコの11カ国より11名の行政担当者・研究者とJICAニカラグア事務所職員1名が参加。

## ◆ 環境省委託事業 「インドネシアにおける湖沼水質改善のための技術協力」



2024年1月16日～17日

2022年度に実施したラワペニン湖の現地調査を基に土壌流出、家庭・農業・畜産排水処理等の課題解決策や日本での優良事例を紹介するワークショップを実施。インドネシア環境林業省及び中部ジャワ州等より約50人が参加。

# 99%の雑談と1%の相談

京都大学  
名誉教授 清水 芳久



2024年1月1日午後4時6分に石川県能登地方を震源とするマグニチュード7.6、最大震度7の能登半島地震が発生した。能登半島北東部では、2020年12月ごろからマグニチュード5以上の群発地震が続いていた。今回はこれらの規模をはるかに上回る大地震であった。7県・1府（新潟県、富山県、石川県、福井県、長野県、岐阜県、大阪府、兵庫県）で被害が発生した。1月29日現在で、死者236名を含む人的被害1,523名、住宅被害19,286棟（全壊122棟、半壊1,900棟、床上浸水6棟、床下浸水19棟、一部破損17,239棟）が報告されている。上下水道や電気等のライフラインもまだほとんど復旧していない状況が続いている。



能登半島地震の震源地と各地の震度



能登半島の景勝地として知られ、軍艦が向かってく様に見えるその形から「軍艦島」とも呼ばれる珠洲市の「見附島」が能登半島地震の影響で大きく崩落した。私が子どものころから見慣れた景色が別物になってしまった。

私は、地震発生時は京都の自宅で通常通りのお正月を過ごしていた。突然の地震を感じてテレビをつけたところ、既に能登半島には大津波警報が出ていた。私は今回の被災地である能登半島で育った。実家は能登町にあり、高校は珠洲市の飯田高校に通っていた。家族や親戚は能登半島には住んでいないが、金沢に住んでいる姉に電話した。「人生で一番の揺れを感じた」と姉は語っていたが、幸いにも被害はなかった様だった。地元である能登町の幼馴染の何人かに携帯電話で連絡を入れようとしたが全く繋がらなかった。最終的に幼馴染からの連絡が来たのは1月9日であった。友達は無事であったが、今も避難生活を続けている。この時期の能登半島は、氷点下の冷え込みとなる日が続く、一年の中で最も気温が低くなる時期である。遠くにいる私には何もすることができないが、体調管理に十分に気をつけてと願うばかりである。

幼馴染とは高校を卒業して私が能登半島を離れて以来、ほとんど会って話をする機会はないままにもう40年以上が過ぎている。最近では群発地震の発生の度に「大丈夫だった」と言って携帯で連絡をすることが続いていた。それぞれが短い会話であったが、今回は被害の大きさもあっていつもよりは長い会話をすることができた。互いに初めはよそよそしい標準語で始まり、次第に忘れていたと思っていた地元訛りでお喋りをした。そのほとんどが地震発生時のこと、その後の避難のこと、現在の避難所のこと、家族のこと、友達のことといった会話である。子供時代に遊びながらワイワイと、同じ場所と時間を共有して過ごしてきたからこそ、この様な時には普段はあまりしない真剣な会話ができるのだということを痛感した。

私は能登半島で生まれた訳ではない。父親が鉄道を建設するための現場監督として赴任したことから、そこで生活することになった。そのため小学生低学年の頃は地元での最大行事の一つである夏祭りに参加させてもらえなかった。よそ者だった訳である。いつも一緒に遊んでいる友達が、その時期だけはよそよそしくなったことを覚えている。それでも何年も地元に住んでいると、徐々に内部に入れてもらえる様になり中学生の頃には大人に混じって一緒に夏祭りを盛り上げる様になっていた。真面目に夏祭りの相談をした記憶はない。ふだんの生活や雑談を通してなんとなく受け入れてもらったのだろうと思っている。ある年の夏祭りの前に、突然に「お前も入れよ」と面と向かって言ってもらったことを覚えている。「うん」という私の短い返事が子供同士の真剣な会話であった。今は、長い年月をかけて育んだ友情を無意識に認めてもらえたんだなと思っている。

国際湖沼環境委員会が進めている統合的湖沼流域管理 (ILBM) は、世界の様々な環境下にある湖沼を対象に、多くの分野のステークホルダーが協力して、持続可能な湖沼管理と健全な湖沼とその生態系の保全を推進し、人と人、そして自然とのつながりを大切にしていくことを目標としている。行政界や文化、習慣、宗教等を超えて、多分野の人たちが流域管理をするためには、もちろん流域管理に関する真剣な議論が必要不可欠である。しかしながら、真剣な会話だけで相互理解を得るのはなかなか難しい。ILBMのみならず、真剣な議論・会話を裏付けるためには友情や愛情が必要である。お互いに普通の会話や雑談を通じての共有した時間がない限り、どんな真剣な会話や言葉も相手の胸には突き刺さらない。もっともっと多くの雑談が必要となる。

最後に、能登半島地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げますと共に、亡くなられた方やそのご家族には、心よりお悔やみ申し上げます。また、一日も早い復旧・復興と被災者の皆さまが平穏な日々に戻れますよう、お祈り申し上げます。能登半島のきれいな海と山、人々の温かい心が一日も早く元通りになりますように。そのためにたくさん訪問し、雑談をしようと思っている。

# ILECの活動概要 (2023年度)

- 5月 23日 国際持続可能開発研究所 (IISD Experimental Lakes Area: IISD-ELA) マシュー・マッカンドレス氏 来訪
- 6月 2日 関西みらい銀行様よりeco定期預金の寄付を拝受  
7日 近畿労働金庫様より社会貢献預金「笑顔プラス」の寄付を拝受
- 7月 7日 中国科学院水生生物研究所淡水生態学研究センター 徐军氏 来訪  
23～29日 琵琶湖モデルを活用したJICA草の根技術協力事業 (訪日研修) (草津市他)  
27日 日本万国博覧会記念基金助成事業 助成金贈呈式に出席 (次世代リーダー育成事業) **【写真①】**
- 8月 5日 「第4回びわ湖まるっと親子セミナー」を近畿労働金庫・認定NPO法人びわこ豊稔の郷と共同実施 (守山市) **【写真②】**  
20～25日 2023年度マレーシアにおけるPESSVA導入プロジェクト 来日ワークショップ (草津市)
- 9月 19～21日 第19回世界湖沼会議準備会合 (ハンガリー・バラトンフュレド)  
29日 **H**世界湖沼会議に向けたワークショップ “SLM達成に向けて:琵琶湖・淀川流域はどう貢献できるか” (草津市)
- 10月 12～13日 第10回世界水フォーラム・第2回ステークホルダーコンサルテーション会合に出席 (インドネシア・バリ) **【写真③】**
- 11月 6日 **H**ILEC-UNEP 国際コロキウム “SLMの推進に向けて: 課題、現状、教訓” (バラトンフュレド)  
7～9日 第19回世界湖沼会議 “湖沼を越えて: 持続可能な利用に向けて科学・文化・ガバナンスを繋ぐ” (バラトンフュレド)  
10日 ILEC科学委員会総会 (バラトンフュレド)  
20～12月8日 **W**2023年度JICA課題別研修 Stage 1
- 12月 6～7日 第4回国際熱帯湖沼学会議 (TROPLIMNO IV) に参加 (インドネシア・ボゴール) **【写真④】**  
20日 **H**第19回世界湖沼会議 報告会 (大津市)



写真①



写真②



写真③



写真④

**W**ウェブ **H**ハイブリッド (現地+ウェブ)

## 2024年

- 1月 10～2月14日 2023年度JICA課題別研修 Stage 2 (草津市他)  
16～17日 **W**インドネシア湖沼管理ワークショップ  
23日 **H**湖沼流域管理に係る専門家会合～第19回世界湖沼会議報告会～ (草津市)
- 2月 2日 JICA地域理解プログラム (草津市他)  
19～23日 2023年度マレーシアにおけるPESSVA導入プロジェクト (マレーシア・ブキットメラ)



# WLC20は2025年オーストラリア・ブリスベン

次回の世界湖沼会議(WLC20)は2025年7月にオーストラリアのブリスベンで開催されます。記念すべき第20回に初のオセアニアでの開催実現となりました。ブリスベンはオーストラリアの東部に位置するクィーンズランド州の州都で、ゴールドコーストに近く、年間を通じて観光客が多く訪れるエリアです。南半球では7月は冬に当たりますが、ブリスベンの平均気温は20℃程で雨も少なく温暖な気候です。ブリスベンは蛇行するブリスベン川によって二分されており、市街地と緑地が共存する水と緑の都です。ブリスベン川は過去の開墾の影響によるその色と形状から“Brown Snake”(茶色の蛇)と呼ばれています。2032年のブリスベンオリンピックまでにその色を青く変え、持続可能でカーボンニュートラルなオリンピックの開催を求める声が高まっており、このビジョンを達成するための方法を会議参加者に呼び掛けます。WLC20は湖沼をテーマにした会議ですが、今回の会場となるブリスベンコンベンションセンターはブリスベン川に隣接しています。そこでこの会議では、河川と湖沼の連結性から土地と水の管理に対する統合的なアプローチの必要性を問い、また亜熱帯・熱帯地域を管理する上での課題を取り上げます。



ご支援・ご協力ありがとうございます!

2023年度

## ●賛助会員(法人)として会費をいただきました企業・団体様のご紹介(順不同)



## ●寄付をいただきました企業・団体様のご紹介(順不同)



## ILECサポーター(賛助会員・寄付)募集!

ご支援いただきました企業・団体様を当財団ウェブサイトおよびニュースレターにてご紹介します。詳細はウェブサイトをご覧ください。▶ <https://www.ilec.or.jp/support>



INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION (ILEC)



〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091 公益財団法人 国際湖沼環境委員会  
 ー 事務局 ー Tel: 077-568-4567 / Fax: 077-568-4568 / E-mail: infoilec@ilec.or.jp  
 Website: www.ilec.or.jp / Facebook: www.facebook.com/ilec.japanese

\*本ニュースレター最新号、WLC19特集の臨時号、バックナンバーは上記の当財団ホームページでもご覧になれます。